日本行動計量学会会報
第9号
1976年6月1日
日本行動計量学会
運営委員会広報係
東京都文京区本郷7－3－1
東京大学医学部保健
学科疫学教室内

学問と流行

野崎昭弘

私の専門は、オートマトン理論だとか計算理論などと称していますが、あまり「計量」的な方面ではありません。わずかに、「行動のモデル化」というところで、「行動」計量学とのつながりがある程度なので、わが学会の模範的会員では全くありません。

それでも東京にいた頃は、運営委員の一人として多少のお手伝い（お邪魔？）もしましたし、また林理事長、印東先生、池田先生はじめ、多くの方々とお話する機会を得て、大変喜んでもおりました。それが山梨県に移ってから、お手伝いも思うにまかせず、事務局の方々の隠れたご尽力の、恩恵をこうむるばかりです。

そのような凡会員でも、いろいろな人から、行動計量学（会）への関心を示されたり、問い合せを受けたりすると、うれしいものです。たとえば、つい最近の例だけでも、音楽の計量化に興味をもっている人、大学の将来計画委員会、朝日新聞学芸部など、いろいろな方面からの問合せに応じて、大会のプログラムを見せてあげたり、学会の資料（設立趣意書、学会誌など）を貸してあげたり、また研究者の紹介などをいたしました。

学問の世界にも、流行はあるものです（特にアメリカでは、浮沈が激しいようです）。論文が審査を通り、雑誌に掲載されるまでの所要時間にしても、よい論文ほど早いというものではなく、むしろ「目下流行中」で同業者が多いということの方が、大きなファクターになるようです。そうかと思うと、大流行した分野（ないしトピック）が、数年もたないうちに下火になり、別の分野にとって代られることも珍しくありません。昔私が手を出した「機械翻訳」なども、花の黄金時代から急激に没落した分野のひとつです。一方、も少し広い「人工知能」のように何回かの浮沈をくぐりぬけて、今再び関心をあつめている分野もあります。

では、行動計量学は、どのような方向に進むでしょうか。今はまだ（日本では）会員数も多くなく、ひと頃の超能力ほどのブームになっていないことはたしかです。しかしこれほど幅広い問題を抱え、活気と将来性とを備えている領域は、そう多くないでしょう。私としては、行動計量学が、流行に乗ってもそこで固まることのない、いつまでも若々しく流動的な学問領域であってほしいと願っています。

（日本行動計量学会理事・山梨大学工学部教授）

和文誌原稿募集

和文誌「行動計量学」第四巻二号（来年三月発行）の原稿を募集します。原稿〆切りは、九月末です。和文誌への原稿の応募状況はこれまであまり芳しくありませんでした。ふるって御応募ください。

応募規定は「行動計量学」表紙ウラに掲載されています。

会費納入のお知らせ

昭和五十一年度の本学会会費の既納者は五月二十日現在二九〇名（納入率、三六・五％）で、著しく低率です。会費未納者が多くなると、学会の諸活動に支障をきたしますので、未納者は振替用紙（振替番号・東京一四八〇五六）を用いて至急お納めください。

なお、長期間会費を納入しないと、会則により学会を退会したものとみなされますので御注意ください。

ノヴィツク（Novick）教授来日
各地で講演会開かれる

ベイズ統計学とその教育分野への応用で知られるアイオワ州立大学のM・R・ノヴィツク教授が、このほど有志の招きで来日した。

三週間（五月四日から二十五日まで）の滞在期間中、各地で講演会が開催され、熱心な聴衆との間で活発な意見交換が行なわれた。

講演会の日程

○五月八日（土）統計数理研究所
「Assessing the Utility」

○五月十日（月）東京大学
「Criterion-referenced Test and Decision」

○五月十三日（木）東北大学
（演題は東京大学と同じ）

○五月二十日（木）大阪市立大学
（演題は東京大学と同じ）

○五月二十四日（月）慶応大学
「Computer assisted Data Analysis」

ーノヴィツク教授のことー

柏木繁男

五月はじめから約3週間、学術振興会の助成で教授の来日が実現した。アイオワ州立大学の統計および教育学部で教べんをとりながら、多くの専門家を育成している。東北大学教育学部の繁桝算男講師もその一人である。

彼の統計学は、サヴェジおよびリンドレー等の系列に入るものと思われ、とくに、その教育学への応用にも強い関心が払われている。この関係のテーマについては、東京大学、東北大学および大阪市立大学で講演がなされ好評であった。また、彼流の方法と原理により、一般ユーザーにもなじめるシステムCADA(Computer Assisted Data Analysis)を開発している。これについては、慶応大学で解説が行われた。主観的ベーズ統計学の徹底した応用・普及を念頭としており、そのためには可能な限りの努力と資金集めに力を尽してきた。昨年度だけでも、三千万円を越える研究を行ったという。男性的な魅力を具えた将来に期待のできる研究家でもある。（日本行動計量学会会員、東洋大学工学部）

＊＊＊＊＊＊

国際学会だより

◇国際ME学会：
八月二日～六日の五日間、第十一回国際ME学会（ICMBE）がカナダのオタワ市で開催される。日本からは、約八十人（発表は四十三件）が参加する予定。（国内連絡係は、東大・医の古川俊之氏）

◇国際バイオメトリック会議：
Biometric Society が主催する第九回IBC（International Biometric Conference）は、八月二十三日から二十七日まで、米国ボストン市で開催される。（日本支部代表者は東大・農の斎尾乾二郎氏）

"Behaviormetrics"について

解説　野元菊雄

「行動計量学」を Behaviormetrics と英訳して学会名その他に公式に使うことにしている。この語はいうまでもなく behavior と metrics とを合わせて作った語である。この二つを合成するについて数人の外国人に当たってみると最上は二語のままにしておくことだという。しかしわれわれとしては、新しい学問として一つのものと考えて打ち出したいと考えた。このような形で二つを結びつけて一語としても誤りではないとのことなので、一語とすることにした。一語にするに当たって behavior-o-と-o- をつけることも考えられるが、これは口調や語の成立からあまりよくない、との説である。metrics は韻律学・作詞学との訳が英和辞典にはあるが計量学を意味させてもよかろう。これは Psychometrika, Econometrica などの誌名からも明らかで、欧文誌名を Behaviormetrika と -ka にしたのは〔k〕の発音には -k の方がより一般的だと思ったからである。（本学会理事・国立国語研）

会議議事録要旨

◇理事会（五月十二日）
於　統計数理研究所
出席者　理事　七名

1. 五十年度（仮）決算報告、および五十一年度予算案の承認。
2. 四十九年度の会費未納者十七名を退会扱いとする。
3. 企画委員会（行動計量学シリーズの発行を担当）の委員長青山理事が病気のため、林理事長が委員長を兼任し、準備を進める。
4. 行動計量学会総会の会計は、原則として学会の会計とは独立採算でおこなう。
5. 各種委員会報告（和文誌、欧文誌、運営委員会）

◇運営委員会（三月十五日）
於　学士会館分館
出席者　運営委員　九名

1. 第四回講習会を「調査法」のテーマで、五月二十七～二十九日の三日間、大阪で開催する。第五回講習会は「多変量解析」のテーマで六月二～四日の三日間、東京で開催する。
2. 第十二回シンポジウムを、SMCのイニシアティブにより四月二十四日に開催する。題目は「システムシミュレーションと人間」。オーガナイザーは渡辺茂氏（東大工）。
   なお、SMCの他に日本システム工学会からの共催の申し入れがあり、これを承認した。
3. 小グループ研究会の記録として、各グループごとに抄録集を作成する案に関して、なお、具体案を作成して検討する。
4. 広報係を運営委員会の下部組織として設置する。係は設立準備委員（水野、西川、今井）の他に、岩坪秀一、梶田叡一の両氏を加えた五名とする。
   広報係は、(一)会報の作成、(二)本学会と関連のある他学会との連絡網の作成、を当面の任務とする。

◇運営委員会（五月二十四日）
於　学士会館分館
出席者　運営委員　十名

1. 月例シンポジウムは、年二回はSMC（会報八号参照）にイニシアティブをとってもらった形で開催し、他の三回（または二回）は本学会がイニシアティブをとる。SMCとの連絡窓口を事務局（柳井氏）が担当する。
   なお、今後は会場が同じ場所に固定しないよう配慮する。
2. 第十三回月例シンポジウムは印東太郎氏（慶大・文）をオーガナイザーとし、七月三日（土）に慶応大学にて開催する。テーマは「分布」。
3. 第六回以降の講習会の開催の仕方について、テキストを他に発行したものを用いるなど、適当な方法を具体的に検討する。
4. 小グループ研究会の活動を援助するため、補助金を出すよう善処する。

トヨタ財団研究助成公募のお知らせ

トヨタ財団は、昨年に続いて、①交通安全、生活・自然環境、②社会福祉、③教育・文化、の三つの領域の研究に対して、総額三億円の研究助成を行う。昨年は、全部で三十九件（行動計量学会会員二件）の研究に助成金が与えられた。応募の締切りは六月二十五日、詳細は㈱〇三（三四四）一七〇一～三のトヨタ財団へ問い合せてください。

月例シンポジウムのご案内
―総合テーマ「分布」―

印東太郎氏（慶大・文）をオーガナイザーとする第十三回月例シンポジウムは、総合テーマを「分布」として、七月三日に開催される。

（日時）七月三日（土）一時半
（会場）慶応大学、新研究会議室
（三田校舎）

なお、当日、参会者は〝特集・分布〟が掲載されている「行動計量学」第三巻一号を持参してください。スピーカーには、竹内啓氏（東大・経）、岩田暁一氏（慶大・商）、大島正光氏（医療情報システム開発センター）、印東太郎氏が予定されています。

―・―・―・―・―・―

◆欧文誌原稿募集◆

欧文誌 Behaviormetrika, No.4 の原稿〆切りは、十二月末です。投稿の要領については既刊誌のウラ表紙のウラを参照してください。

欧文誌への投稿は、この頃増してはおりますが、まだまだ不十分です。ふるって御応募くださるようお待ちしております。

研究会だより

計量分析談話会（名古屋地区）

本学会の創立とほぼ同時期に名古屋地区で発足した研究会で、会の名称が示すように特定のテーマに限った研究チームではなく、行動計量に関連した研究成果の交換によるメンバーの実力向上を目標にしている。専攻に関係なくだれでも歓迎する門戸開放主義が特色で、この会を通じて本学会の存在を知り入会した会員も多い。

隔月開催を原則にして着実に回数を重ね、この五月の第十五回の会合では、名大・文の大屋和夫氏がSchema learningに関する実験的研究を、同・教育の内田敏夫・林文俊両氏がINDSCALモデルの検討を発表した。各回の参集者は二十名前後であるが、メンバー全体はかなりの人数である。大半は二十代の若手で、運営も若手（幹事は名大・教育の村上隆氏ほか）に任されている。目下、今後の発展を期して、過去の実績をふまえた新企画を立案中とのこと。

次回の予定は七月二十四日（土）二時より名大教育学部で中野靖彦氏（愛教大）の「児童における知的能力系列の構造分析」ほか。

会員の声

教育現場におけるデータ収集

野嶋栄一郎

ここ2年ほど、国立教育研究所CAIプロジェクトの現場担当として、都内葛飾区のある公立中学に通いつめている。その毎日は、教育の実践と実験的研究の両立のむずかしさを痛感させられる日々である。

学校は、びっしりつまった授業時間以外に、実に行事の多いところで、しかもそれらが、かなり流動的に運用されるところである。したがって、放課後に実施される生徒個々のCAI学習のスケジュールも弾力的に運用せざるをえない。また、生徒も放課後は塾とかクラブとか病院だとかの予定をもっている。これらをすべて考慮して、どれからも拘束されない生徒だけ残せば、ずいぶんと偏ったデータになろう。逆に、時間的に余裕をもたせたスケジュールを組むと、学校のカリキュラムの進度との関係でデータとしての統制を著しく欠いてしまう結果になる。

このような問題以外にも生徒は一時的な要因による影響を受けやすい。たとえば、前日にテレビ局が取材に来たりすると、次の日はグンと出席率が良くなること、できめんである。この逆の事実もある。さらに、どんなに心理的枠ぐみを統制しようとしても、生徒はやりたいようにやる。コンピュータがはじき出す正答率には目もくれず、いろいろな答を入れては楽しむ生徒もいれば、ノルマをただ果たすために先へ進むことだけを考える生徒もいる。もちろん、問題を解くのに熱中する生徒も多いのだが……。

いずれにせよ、教育の実践、とりわけ教授学習過程に関する実証的な研究では、分析以前の生のデータに対する鋭敏な感覚と大胆な洞察が必要であると思われる。データの過信は危険である。教育実践にともなうデータ解析の方法としてふさわしいものは、強い仮定をもった高度な解析よりも、現実的な仮定から出発した、したたかな解析方法である、ということではなかろうか。では何か、と問われても、当面は困るのだけれども。

（日本行動計量学会会員、国立教育研究所）

編集後記

3ページの運営委員会議事録にあるように、このほど、学会情報を広く収集して会員の研究活動に役立てることを本務にする広報係が設置されました。それに伴なって、従来は事務局が担当していた会報作成もこの号から新設の広報係の手に引継がれました。

本学会も発足後、満2年を経て、学会の事務量もますます増加しております。今回の措置は、事務局のような負担を少しでも軽減してあげようというねらいも含んでいます。実際に作業してみると、このようなパンフ一つでも意外に手間のかかるもので、日頃の事務局のご苦労がよくわかります。

広報係としましては、せいぜい努力する覚悟でおりますが、会員諸氏のご支援なしでは勤まりません。力不足を補っていただく意味でも、これを機にいままで以上の内容充実を図る意味でも、会員のご意見をお待ちしております。

学会への要望、会員に有益な情報、活動状況など、種類と分量を問いません。なんでも歓迎しますので、広報係（3ページ参照）までお寄せください。（水野記）